

アメリカ探偵作家クラブ賞受賞作

夏の稲妻

The Rain Keith Peterson

キース・ピータースン

芹澤 恵 訳



創元推理文庫

検 印
廃 止

訳者紹介 成蹊大学文学部卒業。英米文学翻訳家。訳書にピーターズン「暗闇の終わり」「幻の終わり」、ヴァルコア「スコッツヴィルの殺人」など。

夏の稲妻

1991年12月27日 初版

著 者 キース・
ピーターズン

訳 者 ^{せり}芹 ^き澤 ^{めぐみ}恵

発行所 (株) 東京創元社

代表者 平 松 一 郎

(162) 東京都新宿区新小川町 1-5

電 話 03・3268・8231-営業部

03・3268・8204-編集部

振 替 東 京 6-1565

暁 印 刷・本 間 製 本

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社までご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

©芹澤 恵 1991 Printed in Japan

ISBN 4-488-26703-3 C0197

アメリカ探偵作家クラブ賞受賞作

夏の稲妻

The Rain Keith Peterson

学院図書館

ピーターソン
戸澤恵訳

章



ISBN4-488-26703-3

C0197 P550E

定価 550円(本体534円)

情報屋のケンドリックから数枚の写真を見せられたのは、八月の暑い盛りのことだった。上院選立候補中の議員がSM行為？ ウェルズは慎ましく情報提供の申し出を断ったが、翌日ケンドリックは死体となって発見された。失職の危機に瀕したウェルズは、職業生命を賭けて卑しき街をさ迷うが……。夏の終わりに、彼が到達した真実とは？ MWA最優秀ペイパーバック賞に輝く第三弾！

夏の稲妻

キース・ピータースン

芹澤 恵 訳



創元推理文庫

THE RAIN

by

Keith Peterson

Copyright 1989 in U. S. A.

by Andrew Klavan

This book is published in Japan
by TOKYO SOGENSHA Co., Ltd.

Japanese translation rights
arranged with John Farquharson Ltd.
through The English Agency (Japan) Ltd.

日本版翻譯權所有
東京創元社

夏の稲妻

本書をグレン・ボリンに捧げる

彼の名前はメイフォース・ケンドリック三世といった。情報屋だった。彼はその日の午後、『スター』のオフィスにいるわたしのところに電話してきた。「おれの新しい部屋を見に来てくれよ、ウェルズ」と彼は言った。八月のことで、市は活気を失っていた。ケンドリックは商売のネタを仕入れたらしい。それを聞き出すために、わたしはその夜、十一時近くに彼のもとに向向いた。

彼の新しい住まいはイースト・ヴィレッジのアヴェニューAから七丁目の通りに少し入ったあたりにあった。通りの南側は半分ほどが空き地になっていて、建物を取り壊したあとのせせこましいスペースを、瓦礫の山が占領していた。通りの北側には、玄関の階段とレンガの壁と暗い窓の列が続いている。わたしはダッジ・ダートを通りに停め、車を降りて歩きだした。

暑い夜だった。空気がよどみ、舗道のうえでは湿気が霧になっていた。霧は夜の闇のなかに低く垂れ込めていた。街灯の明かりが滲んで見えた。霧に遮られ、いつもなら街灯の明かりが

あっても見えるはずの星が見えなかった。どんよりと煙った空は低く見えたが、雨は降りそうになかった。

全身を真綿ですっぽりとくるまれているような感じがした。ジャケットは脱いで肩にかけネクタイも緩めていたが、それでも汗の滲んだシャツが身体にまとわりついた。煙草も吸っているうちにまぶしくなってきたので、溝に投げ捨てた。

戸口のまえを通り過ぎるたびに、いくつもの黒い眼がわたしを見送って動いた。いくつもの顔が帽子のつばの陰から笑いかけてきた。いくつもの唇が押しこらした声で囁きかけてきた。

「葉っぱ、どうだい？ 一服、どうだい？」わたしは歩き続けた。ケンドリックの部屋がある建物のまえまで来ると、カーキ色のシャツを着た男が玄関の階段の手すりにもたれて立っていた。男はにやりと笑った。

「よお」男は語尾を引き伸ばして言った。

わたしは男に眼を向けた。男は笑うのをやめた。わたしは玄関まで階段をのぼっていった。

ドアを押してホールに入った。壁のブザーはむしり取られてなくなっていた。それでも支障はなかった。内扉の鍵も壊されていたから。わたしは内扉を押した。中に入ると、リノリウムが剥げかかった床から、長い階段がはじまっていた。わたしは階段をのぼっていった。

暑く重苦しい空気がわたしについて昇ってきた。まるで綱でその空気を引きずってでもいるようだった。二階にたどり着いたときにはすっかり息が切れていた。わたしは階段の手すりを回って廊下に出て、一列に並んだ名前のない黒いドアのまえを歩いていった。別の階段に行き

着くと、今度はそれをのろのろとのぼった。足を引きずって一段のぼるたびに、靴が床をこする情けない音がした。

額から汗が吹き出した。三階までのぼり着くと、まっすぐに廊下の突き当たりまで歩いていった。天井の明かりが切れていた。廊下の端のドアは暗くて見えなかった。わたしはその暗闇に足を踏み入れ、ドアを一度だけノックした。

ドアが細めに開き、胸がむかつくほど甘ったるい香のような匂いが漂ってきた。ドアのチェイン越しにケンドリックがこちらをのぞいた。わたしを認めると、彼のブルーの眼が輝いた。彼がにやりと笑ったのが匂いでわかった。

「ウェルズ」と言って彼は咽喉の奥でくぐもった笑い声をあげた。

ドアが閉まり、チェインが鳴る音が聞こえた。それからまたドアが開き、わたしはなかに入った。

ケンドリックはまだ薄ら笑いを浮かべていた。血色の悪い唇を歪め、黄色い歯を剥き出しにしていた。彼は頭をひよこひよここと小刻みに上下させながら、もう一度咽喉の奥で笑い声をたてた。いつもながらよく笑うやつだ。

年齢は三十をいくつか出たところだったが、無理をすれば十七歳でも通っただろう。顔色の悪い人間にときどき見かける実に滑らかな肌をしていた。そしてその夜はティーン・エイジャーが穿くような、ふくらはぎまでの丈の薄汚れたズボンを着き、花柄のシャツを着ていた。浮かべている表情が——狡猾さと愚鈍さの入り混じった表情が——また、彼の若者のような顔を

いっそう若く見せていた。そんな顔をしていると、彼はまるで、鍵穴から女子のロッカー・ルームをのぞき込んでいるハイスクールの生徒のように見えた。穴居人のような広くて秀でた額。奥に引っ込んだブルーの眼は、その下に隠れているように見えた。額を覆うように、細くてまっすぐなブロンドの髪が眉毛のあたりまで垂れかかっていた。ときどきそれが視野に入ってくるのか、うっとうしそうに払いのけていた。

「メイフォース」わたしは挨拶代わりにうなずいた。彼は薄ら笑いを浮かべ、咽喉の奥で笑った。それから涙をすすりあげ、シャツの袖で鼻を拭った。

「汗びっしょりじゃないか」と彼は言った。「ビールでも呑むかい？」

「ああ」

わたしの右側のカウンターの向こうが簡易キッチンになっていた。彼はそこに入っていくと冷蔵庫を開けた。わたしは狭い部屋のなかを見回した。ワンルームの安っぽいアパートメントだったが、驚くほどきれいに片づいていた。床はほとんどがくたびれたオレンジ色の敷物に覆われていた。部屋の奥の窓際には、ピーチ・カラーのすり切れたソファが置いてあり、その上に花柄のカーテンがかかっている。八月の夜風では、カーテンはほとんど動かなかった。部屋のあちこちにオレンジ色のデレクターズ・チェア、さらに床の上に色とりどりのクッションが置いてあり、坐れるようになっていた。花瓶を載せた安定の悪いライティング・テーブルがひとつ。壁には絵画のポスター——港、踊り子、草に覆われた公園。穏やかな印象派の作品。ケンドリックは大儀そうに歩いてくると、わたしの手にバドワイザーの壺を握らせた。それ

からにやりと笑い、咽喉の奥で笑い声をたて、涙をすすり上げた。

わたしはジャケットをディレクターズ・チェアに投げ出した。「いい部屋じゃないか」

「まあね」

「あんたのか？」

「ちがうよ。友だちのだ」ケンドリックは頭を小さく振るように上下させながら、ライティング・テーブルのほうに歩いていった。

わたしはビールをぐっとあおった。「デリラに追い出されたのか？」

ケンドリックは咽喉の奥で笑った。「ちがう、と言いたところだけど、実はそうなんだ。お見通しのように」

「ああ、お見通しさ。またボン引きをはじめたんだろう。デリラに警告されていたくせに」

ケンドリックはテーブルの抽斗ひたしをがたがたやって開けようとしていた。テーブルの華奢きょしやな脚が揺れ、花瓶が傾き、倒れた。テーブルの上に水が少しだけこぼれた。

「くそっ」と言ってケンドリックは、テーブルの端に転がっていった花瓶をつかみ、両手でそれをまっすぐに置き直した。「まあ、あいつだって人のこと言えた義理じゃないさ。こっちはちよっとばかり仕事の間口を広げただけだよ」ケンドリックはもう一度抽斗を揺すり、ようやく開けることに成功した。抽斗のなかに彼の額から汗が滴り落ちた。彼は抽斗から手を離すと、シャツの裾を引っ張りあげ顔を拭いた。腹の皮が引っ張られ、あばら骨が飛び出しているのが見えた。彼はシャツを引きおろした。それから涙をすすり上げ、シャツの袖で鼻の頭を拭いた。

わたしはポケットから煙草のバックを取り出すと、一本揺すり出して口にくわえた。ライターを近づけながら、ケンドリックが抽斗のなかを引っかきまわすのを眺めた。

メイフォース・ケンドリックは名門一族の末裔である。彼の父親のメイフォース二世はブロードウェイの大物プロデューサーだった。祖父のメイフォース一世は大恐慌の際にひと財産築き上げた、数少ない財界人のひとりだった。

メイフォース三世になって、その血統が衰えたことは間違いない。ウェストチエスターの特権階級が棲息する地域で生まれ育った彼は、幼いうちから上流社会に迎え入れられた。成長するにつれて、有名人や金持ち連中とつきあうようになった。マンハッタンにある洒落た店しゃれで彼が食事をしたことのない店はなく、各界の名士の招待客リストには必ず彼の名前が載るようになった。ときには、眼のさめるような美女と一緒に、『スター』や『ニュース』の紙面を賑にぎわすことさえあった。

十八歳になると彼は、父親の先例にならって、イエール大学に送られた。そこで演劇関係の学生団体に加わることになっていた。ウィップフェンブーフ・ソングを歌うことから始まり、その他もろもろの活動にいそむはずだった。そうやって父親の足跡を継ぐために、高尚なシヨウ・ビジネス界の裏表を学ぶことを期待されていたのである。

だが、実際に彼が学んだのは、自分の身体にある種の薬物を注入すると、人生が楽しくなるということだった。彼は薬物を注射し、飲み、鼻から吸い込んだ。彼はそれが気に入った。奇妙な色の帯が見えてくるのがおもしろくて仕方なかった。うっすらと笑みを浮かべて、その色

の帯が移り変わっていくのを眺めているのは実にいい気分だった。いい気分ですっかり気前がよくなった彼は、そのすばらしい薬を他の人と分かちあうのもいいものだということに気づいた。それもごく安い値段で。ある日のこと、彼はそれと知らずにおとり捜査中の警官に取引を持ちかけた。その捜査官は大学にその件を報告した。父親の力で刑務所送りは免れたものの、イエール大学の学長は彼を放校処分にした。父親は彼を勘当した。

それが十年ほどまえのことだ。それ以来、メイフォース・ケンドリックは劇場街の怪人となり、ブロードウェイや西四十二丁目の通りやヴィレッジやソーホーのカフェに出没するようになった。彼は劇場関係者が出入りするところならどこへでも、出向いていった。そして、かつてともにディナーのテーブルを囲んだ友人や、その友人の友人たちを相手に商売をした。扱う商品は、ときに薬だったり、ときに女だったりした。メッセージを届けたり、お巡りを買収するといった類いの個人的なサービスを提供することもあった。

当然のことながら、お巡りたちも彼を利用した。時折、パトカーのバックシートに彼を引きずり込み、厳しい熊のような顔を彼の眼のまえに突き出し、ライカーズ島（刑務所がある、イーストリヴァー上の島）での生活がいかに不愉快なものか話して聞かせる。そしてその話が彼の頭にしっかりと焼きついたと判断すると、おもむろに、どこそこの売人や大口客の誰それに関する質問をはじめめる。そうやってお巡りたちは、時折、彼がとても役に立つ男だということを認識するのだった。そしてそんなある日、彼らはわたしにもケンドリックを回してくれたのである。

当時わたしはショウ・ビジネス界の麻薬問題についてシリーズ記事を書いており、警察内の

友人がわたしにケンドリックの名前を教えてくれたのだった。最初、彼は警戒していてなかなか口を開かなかった。わたしは彼を高級レストランに連れていき、有名人にインタヴューするときのように接した。しばらくすると、ケンドリックも緊張を解き、わたしが望んだ情報を提供してくれるようになった。さらにしばらくすると、彼はその状況を楽しむようにさえた。自分の名前が新聞に載らなかったことがわかると、ケンドリックは残念がった。それでも、自分の名前が単なる『匿名の情報筋』になってしまっても、充分興奮したらしい。それ以来、折に触れ、わたしのところに電話をしてくるようになった。わたしの興味を惹きそうな情報を握ったと思うと、いつも必ず連絡してきた。彼が受け取る見返りは、ときに上等の食事だったり、ときに現金だったりした。

彼がライティング・テーブルから身を起こしたとき、手にはマニラ紙の封筒が握られていた。再び苦労して抽斗を閉めると、彼は一步わたしのほうに足を踏み出した。が、その封筒を手渡すまえに一瞬ためらった。

「最初に断つておくけど、今度のは安くないよ。わかるかい？　こいつのなかには金のある木が入ってるってことだ。おれの言いたいこと、わかるだろう？」

わたしは煙草をくわえたまま、空いているほうの手をまえに出した。彼は封筒を渡してよこした。わたしは近くにあったディレクターズ・チェアに腰をおろし、床のうえにビールの壺を置いた。それから煙を吐き出しながら、封筒の折り返しを開いた。

ケンドリックはそのあいだに、クッションを枕に床に寝そべっていた。彼の横には小型のカ

セット・プレーヤーが置いてあった。わたしは、そのときになって初めて、静かなギターの旋律が流れていることに気がついた。プレーヤーの隣に灰皿が置かれていた。その中に火の消えたマリファナ煙草があった。ケンドリックは吸い差しをつまみ上げてくわえると、もう一度火をつけ、壊れたスティーム・パイプのような音をたて、煙を吸い込んだ。それから背後のソファの脚の部分にもたれかかった。そしてわたしをじっと見つめ、夢でも見ているような顔つきでほほ笑んだ。

封筒の中には数枚の写真が入っていた。わたしは煙草を口から離し、灰を絨毯のうえに落とした。それが目立たなくなるまで靴でこすってから、再び煙草をくわえた。そして写真の端をつまみ、封筒から引き出した。

メイフォース・ケンドリック三世は咽喉の奥で笑い声をあげた。頭を上下させながら、彼はマリファナの煙を吸い込み、涙をすすった。

わたしは写真を一枚ずつ改めていった。こめかみから汗が吹き出し、顎を伝って流れ落ちた。わたしは煙草をくわえたまま笑みを浮かべた。それから声をあげて笑いだした。ケンドリックはくぐもった声で笑った。

「何者なんだ、彼女は？ あんたのところの女か？」わたしはもう一度声をあげて笑った。「いやはや、まいったね。見ろよ、このざま」

ケンドリックは鼻を鳴らした。「ちょっとした代物しろものだろう？」彼は胸いっぱい吸い込んだマリファナの煙を吐き出して言った。「その娘はおれのところの女じゃないよ。女優の卵って